

生きる身体教育 武術家・甲野善紀との対話から (2) 生きることのリスクを越えて

弘田陽介¹ 甲野善紀²

On the education of "body-transforming" from Dialogue with Yoshinori KONO (2)

Yosuke HIROTA¹ Yoshinori KONO²

Abstract

In recent years the mind-sets called 'Risk Management' spread out rapidly not only to the business world but also to the general public. Against this trend we want to ask "Isn't the life always the inevitable risk?" The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology has promoted "Zest for living / Power to live" in the school education for this decade, but the teachers have lost sight of how to manage it. By this report, that follows the report(1), we cite some instances about the communication skill or the passion of the child, and successively consider radical problems in Japan from the angle of the education of "body-transforming".

Key Words: the Japanese martial arts(BUJYUTSU) , Zest for living, Risk Management, body

・はじめに

前稿「生きる身体教育 武術家・甲野善紀との対話から (1) 歴史・物語としての身体」では、総合的・統合的な教育という現代が抱える問題を入り口に、学校教育とは異なる身体教育の論理を、甲野氏の言葉を導きの糸として探ってきた。そうするうちに決定的な問題の所在が明らかになってきた。それは生活と身体の分離、そして学校教育および私たちの生活と身体をこれまでとは違う原理で貫く科学という思考法である。

本稿は、前稿と同じように、武術家・甲野善紀氏に対する弘田のインタビュー、そして甲野氏が今回の原稿に対して寄せた文章から成り立っている。いわば、本稿は甲野氏が材料を提供し、弘田が調理した料理のようなものである。従って、いくぶん材料がごつごつし、口に運びにくいカレーのようになっていたとしても、それはすべて弘田の責である。現代の教育・科学の状況に対する筆者たちの応答が、この論文の課題となっているが、私たち二人は政策提言者でも、現在の学校教育実践に具体的な変革をもたらそうとする者ではない。従って、ここで記していることは、現代に対する処方箋や対応策といったものではない。すでに前稿で見てきたことだが、そのようなその場しのぎの対応策は、単に新た

1 徳島大学総合科学部

Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

2 松聲館 Shouseikan

な問題の所在を明らかにしてきたにすぎない。

また、ここで、単に現在の日本社会における教育や科学のあり様を傍観者的にシニカルに描き出そうというのではない。というのも、教育や科学のもつ問題点は、私たちの身体にいやおうなく食い込んでいるからである。私たちは国民皆保険や義務教育というもはやその役割を終え、時代遅れになったスローガンに身体をがんじがらめにされて生きてきた。国家医療、公教育のいずれにせよ、近代社会の成立期には画期的な役割を担っていたが、しかし現在の日本においては、どちらも国家が関わる医療・教育以外のものを封じ込めてしまうものである。加えて、新聞やテレビを気楽に眺めていても、「科学」という名の現代の絶対宗教はこの身に及んできている。ここで筆者たちが、本稿を現在の社会状況に対して応答と呼ぶのには、そのような意味合いがある。否応なしにわが身に食い込み、有形無形の影響を及ぼしてくるものに対して抵抗するためには、何らかの応答・態度表明をしなければならない。それが私たちにとっての本稿の役割である。もし、同じようにこの時代の空気の中で窒息しそうになっている人々がおられるならば、本稿が何らかの思案の材料となってくれば幸いである。

・「科学」がつくる身体

さて、本稿では、この身体を取り巻く現状を考察するために、体育、とりわけスポーツ・トレーニングが孕む問題点について言及してみたい。甲野氏はそれについて次のように論じている。

「あらためて、いわゆる科学的トレーニングの問題点について論じてみたい。そして、それと対比して、仕事によって体をつくるという事についても考えていきたい。まず、科学的トレーニングの最大の問題点は、その“わざとらしさ”にある。わざとらしいとは、必然性に欠けるといふ事である。これは、生物というものの本質を考えた場合、きわめて問題がある。なぜならば、生物は皆、その住環境に適した形態や身体的機能をもっている。それはまさに、その環境によって生まれたものである。

しかるに、科学的トレーニングは、そうした状況・環境を無視してデータを基に組み立てられている。そして、これを実行する人間の心理は、そのトレーニングの目的に沿って意識的に負荷をかけて行なわれる。そうすると、どういう事になるだろうか。当然のことだが、トレーニングを行う者は、その効果を期待し、負荷がかかることを意識して行なうことになる。そうなれば、そのトレーニングで疲れることはトレーニングの目的に適うことになる。

そうやって作り上げた体と仕事によって作った体とを比べて考えてみよう。仕事で身体を使うとは、当然の事ながら疲れず長く動けた方がいいに決まっている。したがって、身体にかけられる負荷は、それを負荷と感ぜないようにする事が望ましい。そのため、出来るだけ全身を協調させ、心理的にも負荷を負荷と感ぜないようにすることが重要である。その結果、仕事で作り上げた身体は、より長く、より故障がないように動ける身体を作り上げてゆく。

一方、科学的トレーニングで作った身体はどうだろうか。科学的、理論的に沿って身体

全体を鍛え上げるといっても、身体というのは精妙なものである。表面にあらわれた数値やデータを元に、左右のバランスを整えようとして、その人間全体の働きのなかで釣り合いをとるため異なっていた左右のバランスを、表面上整えようとして、かえって無理をさせてしまっている事も考えられる。意識的に作り上げた身体は、要するに『俺が、俺が』という「お山の大将的部位」を身体のあちこちに作ってしまう恐れが多分にある。そんな『俺が、俺が』という協調性を欠いた部位が身体の中で競い合って、全体の動きが良くなるとは、とても思えない。現に、ウェイトトレーニングを主とした科学的トレーニングの信奉者が、しばしば肉離れを起こしていることは、よく知られている。肉離れなどという身体のトラブルは、昔、毎日のように身体を使って生活していた人間には考えられなかった事だと思う。」

ここで焦点となっている「いわゆる科学的トレーニング」と呼ばれるものは、近年様々な展開を見せてはいるものの、基本的には必要な筋肉の部位を刺激し、そこを重点的に鍛えるという要素還元主義に基づいている。部位を絞って、そこを必要だけ刺激した方が効率がよいというわけだ。しかし、実際の人間の生活では、筋肉のある特定の部位だけを刺激し、疲労させるということはほとんどありえない。甲野氏の論によれば、筋肉の一部だけを用い、疲労させ、その筋繊維の増大を図るというのは、重い荷物をわざわざ片腕だけで持つようなもので身体の使い方としては効率の悪いものを体に覚えこませようとしているということになる。つまり、一部だけが疲労し、他の部位がまったく関与していないような身体の使い方ではなく、リュックサックを背負うように、重さが体全体に分散的に及ぶように身体を使えばなんということもないものを、わざわざ一部の部位の筋増大ということのために全身から見れば非常に効率の悪い動きを行っているというのである。そのため、全身をいかにバランスよく鍛えようとしても、トレーニングでは部分と部分の足し算にしかならないために、結果的に全身のバランスを欠いてしまうのである。

それに対して、かつては実際の人間の生活では、筋肉のある特定の部位だけを過度に刺激し、疲労させるということはある程度ありえないことであった。田植えや収穫といった農作業はもちろん非常な体力の消耗を伴うものであるが、それを長時間続けるためには一部の筋肉だけに頼ってはならない。そのために、かつての生活においては、全身の調和的な協働が知らず知らずのうちに身につけていったのであろう。

それではなぜ、このような「科学的トレーニング」が受け入れられ、世界的に普及するようになってきたのか。かつての日本のスポーツ界においては、野球にしても相撲にしても、ウェイトトレーニングに対する大きな抵抗感が存在していた。だが、「科学的」という名の下で、また単純で即効的に目に見える効果が出やすいという理由の下で、今やあらゆるスポーツジャンルで筋肉トレーニングは必須のものとなってきている。このトレーニングの効果は、刺激一反応という「科学」の図式で汲み取られ、さらにその図式に沿った成果が「客観的データ」として収集されることでその図式の強化が図られてきた。このようにして、かつての労働や生活が有していたような、全身の調和的な協働を元にした精妙な身体の使い方は失われてきたのだと甲野氏は言うのである。

「しかし、現今のような科学的トレーニング全盛の時代では、そうした複雑にして微妙

な身体運用は殆ど省みられることはない。何故なら、そのような複雑な身体使いは同時並列的に身体を作動させるため、何がどうしてどうなっているのかを科学的に記述することが極めて困難だからである。つまり、科学的な分析の網にかかるものとは、複雑な動きを部分化、限定化したものであり、精妙な動きそのものを取り扱うことは不可能といえる。

しかし、何事も『科学、科学』と言われる時代なので、人間の動きという、本来計測し理論的把握が極めて困難なジャンルにおいても、科学的に研究をしないという事は時代に取り残されるという強迫観念があるからだろうか、原理的に、それこそ純粋に科学的論理的に考えれば、絶対におかしな事であるにも拘わらず、部分化・限定化した研究をもって、まるで全て判ったような説明をする者は少なくない。」

翻って考えてみると、学校教育における科学主義も同様の性質をもっていると言える。それは抗いようのない因果性によって進んで行くものである。「なぜ・・・なのか？」という問いに対して、「なぜなら・・・だからである。」という解答の様式をもって答えられるのが「科学」だと、教育関係者は信じている。甲野氏はそのような「科学」を「AならばB。そして、BならばCという単線的な因果性」にのみ基づくものとして、「Aとまったく反対の-Aが両立するような人間の現実」には適用できないと考える。

もちろん甲野氏の指摘を待たずとも、現実には学校で教わるようには進まないということを知っていた。この単線的な因果性は日常生活ではなかなか期待しにくいものである。そのため、科学は「実験(室)」という空間を設定しているのである。その実験室においては、その設定に合う条件しか記述されえないし、また設定に合う解答しか導き出されないようにその設定が予め整えられているのだ。このような実験室から導き出される理論は、ある条件では一定の確実性と効力をもつ。効力があるから、ここまで科学的な近代生活が発展したのである。だが、科学は一つの条件設定下で見出される一つの現実でしかない。

このように科学とは単に一つの思考、そして生活のツールに過ぎないものであった。しかし、学校教育においては、それらの条件設定はなかったものとされ、導き出される結果のみが教えられることになる。その結果の正当性を示す問いのみが学生には提供され、誰が解いても一つの解答が出るように設えられた「テスト」というものが可能になる。つまり、「テスト」はある条件下の一つの現実を全面的な事実に変える。そして、その事実をどのくらい受け入れることができるか、すなわち国家の認定を受けた入学試験が、人間の能力を選別するための手段となり、社会システムの原動力と今でもなっているのである。

・「人間の科学」のお粗末さ

このように科学とは物理化学といった物の原理のみならず、教科書内容、入学試験、社会常識をも規程する規律としても機能する。科学は物体のみならず、身体にも及んでいる。そもそもヨーロッパの言語において身体=物体(英語body、独語Körper)として、同一視されているように、人間の身体には近代以降、科学的見地からの物体の論理が適用されてきた。近代医学や体育学はそのような思想基盤から生まれてきている。「熱が出たら下げる」、「異常は排除する」、「弱い箇所は鍛える」というあまりにも単純な理論(つまりは「元

に戻す」、「すべてを均一にする」という理論）から診断、処方ほ繰り返されている。

このような科学は、ある条件下での物体同士の作用などにおいては確かに有効なのかもしれない。しかし、単線ほ平面的な因果性の中ではなく、複雑な現実の中で生きている人間ほまでそのような科学を当てはめるのはあまりに粗雑なことなのではないだろうか。

実際の病院という現場では医学的な見地から説明できない事象が多々起っている。しかし、そのような事象は、「気のせい」もしくは「何かの間違い」として一笑ほ附される。だが、医学はこの「気のせい」を実は怖れている。薬学者は薬品製造の過程においてその「気のせい＝プラシーボ効果」を二重盲検法によって排除し、薬品自体の持っている効果を確認する。しかし、「気のせい」でも何らかの効果があるから、わざわざこのような面倒なことを行っているのである。「気のせいだって、なんだって、効けばいいものを、その単線的な論理ほ合わないから排除しようとするのが医学の手口ですよ」と甲野氏はこれを逆に一笑ほ附している。

また、ここでは「科学」と一括りにしているが、最先端の科学領域においては、もはや誰も医学のような単純な論理を思考の道具にはしていない。もう80年も前にハイゼンベルクは不確定性原理（光の粒子の位置を測定すれば、運動量は測定できなくなり、逆もまた同じという例証によって従来の科学の方法論の限界を示した）を説き、一つの因果性では捉えきれない同時並列的な現象を扱おうとする量子力学を確立している。このような現代物理学の成果にも関わらず、人間の身体を扱う科学はあまりにも旧態依然としている。実際の教育・医学の現場や理論もそのような単純な因果性に依然留まっている。いや、現代物理学を持ち出さなくても、そもそも科学は一つの仮説から実験を繰り返して、一つの現象を説明する謙虚な方法論であったはずだ。甲野氏は、すでに解剖学者・養老孟司やエイズ研究者・清水宣明らと、科学を国家技術から等身大の学問ほ戻すことを訴えかけてきた（*1）。にもかかわらず、教育・医学の現場で起こることは何も変わらない。このことに甲野氏は怒りにも似た悲嘆を覚えている。

そして、そのような科学の横暴は、単にスポーツトレーニングにとどまらず、出産という生命のまさに根本的な行いにまで及んでいる。

「人間として生活していくための体育が衰えてきて、音楽家やスポーツ選手の身体不調以上に問題なのは、哺乳類でありながら、出産するのに陣痛促進剤などの薬剤や、さまざまな出産のための器具や手術などによらねば満足ほ出産も出来なくなっている若い女性が大変増えてきている事である。拭き掃除などを始めとする家内労働ほ産婦の自然な出産に重要な働きをもっていた、と警鐘を鳴らされている愛知の産科医、吉村医院院長の吉村正氏は、女性が本来持っている産む力による『自然な出産』を40年以上実践され、殆ど医療的介入を行わないため、産まれて来る赤子の元気が過度な医療介入によって生まれた子ほ比べ、全く違っているとの事である。」（*2）

かつては誰もが、どこの地域でも、自分たちの手で子供を取り上げていた。だが、その有史以来の出産という営みは、医者という専門家による医療行為を必要とするようになってきている。この原因として、吉村氏はすでに本論でも取り上げた生活と身体の乖離を取り上げている。かつての家内労働ほ家電製品によって行われるようになったために、女性

は子供を生む身体を有しなくなったということである。もちろん、女性の家事労働や出産を過度に強調することはフェミニズム的な観点からすれば問題があると言えるだろうが、ともかくもここで言えるのは、女性が生命として自然に備えている働きが、全体的に失われつつあるということである。ただし、もちろん、それは女性だけの問題ではない。男性の生殖機能の喪失など様々な諸問題が取り上げられている。それらはすべて人間の身体を取り巻く生活環境の決定的な変化が関与していることはもはや言うまでもないことである。

・学校教育における科学信仰

もう一度、話を学校教育における「科学」に戻そう。なぜ学校では物語やたとえを好まず、科学を愛するのか。それはすでに述べたように、テストが教育体系の最上位に鎮座しているからである。そのテストは社会に対して、人間の品質保証を行うものである。以前よりも学歴信仰が弱くなった現在では、資格試験という新たな品質保証がより幅を利かせるようになってきた。

つまり、学校での教育とは何かを伝えるためのシステムではなく、人間を評価するためのシステムに過ぎなくなってしまったということなのだ。評価をしやすくするために、レベルを引き下げて、教えられるべき世界の像が作られている。そのため、現実の複雑さを無視して、無理矢理、現実を教科という「標本」にしている。科学とはこのような、教師が唯一無二の論理として信仰する教理なのである。同じように、すでに見たスポーツトレーニングでは、身体という生活環境との調和体が、科学の「標本」にされているのである。

医者も同じである。患者と自らの仕事を評価のまな板に乗せるために、マニュアル通りの診療を行う。また一般の医者および病院に通う患者も「だってマニュアル通りじゃなければ、医者それぞれでばらつきが出るでしょ。また患者さんも同じ病気なのに違う治療をされたら戸惑うでしょ。」と述べるだろう。しかし、患者に応じて治療を変えるというのが医者のセンスではなかったのか。

もちろん、彼らが信奉する単線的な科学であっても、それは何がしかの有効性は存在している。それは有効であったから用いられ続けているのである。しかし、それが有効であるか役に立たないかということ以前に、問題とされるべきは、彼らがそのような科学のみを唯一の真理として信奉していることである。ここに物語やたとえが曖昧なものとして排除される理由がある。

もう一度、前稿(1)での主題に戻ると、学校で教えられる科学も一つの歴史・物語でなければならないということになる。例えば、コロンブスのアメリカ大陸の発見も、ダーウィンによる進化論の発見も、学校で言われるように絶対的な事実ではなく、一つの物語に過ぎない。なぜなら、ヨーロッパ人にとってはアメリカ大陸を発見したと語られる事象は、先住民にとってはそれは発見ではなく、異民族による侵略の開始である。またダーウィンの進化論と呼ばれるものも彼一人の独創ではない。同時代に同じ方向の研究もウォレスによって進められていた。つまり、ある独創的な理論もそれまでの時代の思想、同時代の風潮の中で生み出されるものであり、たまたま後世に伝わりやすい形で残ったのがダー

ウィンであったというに過ぎない。

このように学校で教えられる事項、事象の背景には様々なディテールが存在しており、それらを捨象することによって、テストに出題可能な知識と変質してしまう。だが、すでに述べたように、あらゆる知識も一つの物語であり、それはある一つの視点から語られる一つの筋立てに過ぎない。すなわち別の視点からは別の物語が描かれ、一つの名称をめぐる複数の物語が対立するということがありうる。いや、ありうるというより、それが現実の人間の世界なのである。アメリカにはアメリカの物語があり、アラブにはアラブの物語がある。そして、アメリカ、アラブ共にそれぞれの内部が一枚岩であるはずもない。このような複数の物語の対立と共存は、まさに21世紀の課題として私たちに突きつけられてきたはずだ。

・生き物の理とは？

そのような複雑で複数の現実、学校教育では子供に説明できないものなのではないのか。このように学校関係者は述べるだろう。もちろん子供の理解を越える事柄もあるだろう。しかし、かつての知の伝達の様式は、このような複雑で矛盾するような事態を人間の知恵として何とか取り扱い、子供にも伝えようとしていたはずである。今に残る仏典や聖書を読んでも、それは人間の行いの複雑さが、平易な物語の形式で描かれている。特に禅の書物は、オリジナルのテキストに後の注釈者が注釈を加え、その注釈にさらに注釈が付け足されるというように、複数の視点がすでに織り込まれている。

また、和歌や俳句といったものは、決まった形式を用いて、短い言葉で複雑な背景をもつ物語を語っている。ある情景、風景に読む人を巻き込み、単純な因果では説明できない、同時並列的に起こっているものに人々を触れさせる。無論、科学だってそうである。アインシュタインは「並んで走っている鉄道」や「観測者が縛り付けられた宇宙空間を移動する箱」などといった多種多様なたとえを用いて、相対性原理の思考実験を行っている（*3）。それは思考実験に留まるものであるが、宇宙物理学や量子力学の新たな局面を開拓するものであった。

「微妙なことって、たとえじゃないと伝わらない」と甲野氏は言う。ここから彼の技が生まれている。身体がずっとその情景に入り込むようなよいたとえは、ある種の技の実感と結びついている。説明の言葉、直線的なA B C...という因果性ではなく、情景と自らの身体を立体的に把握していくようなたとえと技は一体のものなのである。

彼に言わせれば、教育や医学といった人間の科学は、これらのことを根本的に無視している。教師はAの次はB、という一つの「科学的」というたとえ話しかもっていないということなのだ。それは、環境問題、国際問題等、これだけ複雑になった現代を論じるツールではない。「このような時代に、単純で融通の利かない規格化された人間をいっぱいつくってどうするんだ。まったくどうにもならない。」

甲野氏にとっても、また彼の技を受ける人間にとっても、よく効く技というのは不思議なものなのだ。受ける側はなぜ投げられるのか、なぜ懐に入り込まれるのかわからない

ちにやられてしまっている。「論理的につじつまがあっていない方がよく効く」というのが彼の根本的な探究姿勢である。つまり、生き物である相手に対しては物の理である古典力学は通用しないということなのである。できるだけ、身体というものを複雑な状況で捉えてやる。そうするだけでも相手は、その身体を感知しがたいものとしてしまう。彼の技法の一つである「力を通す」ということは、「非常口に大勢を集中させない」技法として説明されている。肩や膝という力が滞ってしまいがちな部位をうまく使い、全身に力を散らせる。ある意味、わかってしまえば詐欺のような方法なのだと彼は言っている。しかし、その非常口のたとえで、なるほどと思えるかどうか、それで自分のもっている感覚が変わることができるのか、納得の仕方が変わることができるのか。このような問いを通して技ができる。これが生き物の理、人間の理を学ぶことではないか。

それは理路整然と説明された言葉でなんとかなるものではない。ポンとその状況の中に入って行くことなのである。そのためには、身体を通して単純な説明図式に収まらないことを幼少期からやっていないといけないだろう。例えば、独楽を回すこと、竹馬に乗ること一つにしても、それは力学的な説明でできるようになるものではない。しかし、できるようになってしまうと、「独楽を回す時の要領で」と言われれば、そのコツの世界にポンと身を置くことができる。

このコツ・技能の世界には、これまで人間が歴史の中で追求してきた様々な出来事を含みこまれている。物づくり・使用法などどれ一つ取ってみても、時代ごと文化ごとに違いがある。日本刀の扱い方には、刀の規格は戦国期以来変化がないにもかかわらず、無数の流派が打ち立てられ、それぞれ独自の流儀をもっている。時代が下れば、その技能が進歩するわけではない。遺されたそれぞれの技能は、与えられた状況の中で最高のものであるだろう。どの追究が優れていて、どれが劣っているかということではなく、それぞれの時代にそれぞれの文化体系と独自の価値観があったということなのである。そして、それぞれの技法の体系にうまく入り込むことができれば、現代の私たちもその時代の文化をたどるに少しであつたとしても垣間見ることが可能になるのである。

・日本社会全体が抱えている非常に大きな根本問題

さて、科学的教育にせよ、勉強と遊びの区別にせよ、学科の区分にせよ、基本と応用という区別にせよ、そもそも教える側の便宜を配慮したものである。近代学校というシステムは一人の教師に大量の子供を扱わせるために、様々な工夫を導入した。それが学校教育における「科学」の正体なのである。

そして、近代学校を効率的に運用していくために、不必要なものが子供の身体なのであった。身体は、動き回り、遊び、欲望する。社会を生きる子供にとって必要なのは身体をコントロールする精神なのだ。近代の知を子供に植え付けるには、身体を止めること、身体を消失させることが必要であった。その末路が、21世紀なのだ。身体を、欲望を止められた子供たちは、今や「生きる力」をも学校で教えられようとしているのである。

教師および学校教育については、このように語る事ができる。では、その身体を奪われた子供と若者は、今どのようなことになっているのか。教育関係者は例外なく、この10

数年で確実に子供は変わったと言う。いじめ、暴力事件、自殺といった教育問題は、それ以前から存続しており、近年の変化を示すものではない。では、何が変わったのか。誰もそれを外部から観察していた人間はいないだろう。それというのも、日本の社会においては子供だけではなく、大人も変わってしまったからである。

2007年5月13日の、甲野氏のHP「随感録」(*4)では、このような変化によってもたらされた「日本社会全体が抱えている非常に大きな根本問題」を示すある出来事について述べられている。

「北海道のあるローカル線で、朝の通勤通学の時間帯に、ある駅から高校生が通学のため大勢列車に乗るのに、乗った順にドンドン奥の方に詰めなかつたため、発車時刻を4分過ぎてもなおホームに20人以上の乗客が残ってしまい、しびれを切らせた運転士がドアを閉めて列車を発車させたという珍事があったのである。ホームに残した乗客については、運転士から事情の報告を受けたJR側が急いでタクシー7台を手配して乗客を輸送したというが、前代未聞の出来事である。」

この同時期には、子供とその家族が殺し合うという凶悪事件が頻発していた。それらに比べれば、事件というよりも珍事なのだろうが、甲野氏はここに現在の日本の社会がもつ問題性を極めて根深く見通し、「状況を見て、いま何をしたらいいのかという判断が出来なくなっている人間が大量に発生してしまった病んでい る日本社会の実情をハッキリとあらわしたという点で、見過ごすことが出来ない重要な事件であると言ってもいいと思う」とまで論じている。このような出来事は、実際的なトラブルにならないまでも電車内や込み合った町中で頻発している。無論、携帯電話に気をとられ、大音量こぼれるヘッドフォンで完全防備した若者に、何かを期待をしてもしょうがないのであるが、この事件は若者以外の乗客、そして運転士にも問題があったと言わざるをえない。

続けて、甲野氏はこう言っている。「とにかく、これからの時代は学校の成績などよりも状況判断力、コミュニケーション力、責任感を身につけた者のほうが遥かに大切だということを社会全体が認識し、そうした能力を養う方策を立てないと、この国は本当に住むに堪えない国になり果ててしまうだろう。」

いじめや学力低下などの教育問題は顕在化しているが、状況判断力、コミュニケーション力、責任感といった数字としては現れ出てこない人間の能力は、この10数年でまったく失われてしまった。教師も子供も、親も子も、社会人もニートも、とにかく皆が今、必死になっているのは、自らに責任が回ってこないようにするためのリスク回避の身振りだけなのである。

おそらく、この電車に乗っている学生の中にも、奥へ詰めなければ、他の乗客が乗れないことを認識していたものはいるだろう。しかし、自らが動くことはリスクを背負うことである。自らが率先し、周囲と共に動くことは、うまく事が運ばばおとがめなしだが、そうでなければ自らが一身に責任を背負わなければならない空気が今の日本にはある。「KY（空気読めない）」が2007年の流行語大賞にノミネートされたが、この言葉はより円滑なコミュニケーションのために自ら動くというよりも、お笑い芸人のネタを擬した会話のテンポを妨げる人間、もしくは自分から動いて周囲の人間に余計な仕事の負担をかける人間を

排除するための言葉なのである。

・リスクとマニュアルの間で

どうすれば、リスクを回避できるのか。それはマニュアルに従うことである。人間の知恵を集めたものでありながら、誰が作ったのかわからないマニュアルという非人格的なシステムは、自分だけが責任を負わないためのものである。昨今、企業のコンプライアンスという問題が取りざたされているが、不祥事が明るみに出ても、結局マニュアルの規程が細分化されるだけに過ぎない。だが、水が漏れる穴を塞ごうとするその細分化によって、新たな穴が見つげ出される。しかし、マニュアルには責任はない。責任はマニュアルの不徹底もしくは個人の不注意ということに帰されるだけなのである。

学校現場でももちろん同じである。教師は保護者や子供からのクレームに脅えながら生活を続けている。ともかくマニュアルに従い、上司の判断を仰ぐこと、これが教員として生活を続けていくための術なのである。マニュアルはさらに細かくなっていくのに対して、文科省レベルからは「生きる力」、「総合的な学習の時間」といった非マニュアル的な案件が投下される。マニュアル遵守と、教師の自由な裁量という二つの異なる指示。いずれにせよ、教師個人のリスクは増していく事になる。

このような状況の中、「今までのアイディアでは根本的に役に立たないということに気づく必要がある」のではないかと甲野氏は論じ続けてきた。ゆとり教育or脱ゆとりという単純な問題ではないし、またマニュアルで対応できるような安穏たる時代でもはやない。それはそうだろう。「好きにやっでいいよ」ということに対して怯え、「休みの日が怖い」という社員が大量にいる時代である。「本当に日本が危機に陥るという自覚がない」と甲野氏は言う。

もう有能な人間をそれぞれが育てればよい。教育システムがしっかりしていなくても、いろんな才能のある人間が歴史の動乱期にはいっぱいいたんだからそれでいいんじゃないか。重要なのは、学校に行くこと、企業で働くこと、安定した収入を得ることではなくて、どんな人間が育つかということではないのか。「子供でも教師でもやる気さえあれば、やるなどと言ってもやるんだから、後は野放しに放牧しておけばよい」とまで甲野氏は語っている。

「戦後60年、日本は豊かさと安全を求めて邁進し、確かに歴史上かつてなかったほど、その両方も備わってきた。しかし、それが実現してきてどうなったかといえば、自殺、リストカット、引き籠り、ニートといった、貧しく不便で危険が今以上にあった時代では考えられなかったか、きわめて稀であった社会現象が非常に増えてしまった。『地獄への道は善意の敷石によって敷きつめられている』という言葉があるが、現在の日本は敷きつめられた善意の敷石で、人間はその生きる意欲と目的も見失おうとしているように見える。

そもそも人間も生物として考えた場合、他の生物を見てみれば分かるが、『生きる』という事はリスクを伴うものである。そして、そのリスクとは自然界が生物全体に課した共存のためのバランスでもある。

現在、日本各地で鹿の食害が増えているが、これは日本狼を絶滅させたことも大きいと言われている。食物連鎖の頂点に立つオオタカなどの猛禽類は、巢立ちしてから一人前の成鳥となる前に多くが獲物を獲ることが出来ず飢え死にするという。ところが、現在の日本は引き籠っていても飢えることはない。それが良い事なのか改めて深く考える必要がありそうだ。」

甲野氏はそもそも「人間における自然とは何か」という問題を突き詰めるために、武術という道を選んだという。生きること・死ぬこと、それは自然の営みであったはずだ。だが、今やその自然が根本的に脅かされている。これは自然環境の破壊という以前の問題であり、その人間における自然の破壊が様々な問題事象を引き起こしている。ここで甲野氏は「『生きる』という事はリスクを伴う」と言い切っている。そもそも科学にしても宗教にしても、この「生きる」という事はリスクに対する対処法であり、知恵であったはずである。しかしながら、そもそもの役割から逸脱し、過剰に肥大した科学は、このそもそもの「生きる」ことを蝕む形で人間からリスクだけを取り去ろうとしてきた。今の若者や子供にそのツケは回ってきている。にもかかわらず、誰もこの科学信仰に正面から異議を唱えることはできなくなってきた。それは、科学者の特殊な思考様態であった「科学」のダイジェスト版のようなものが、現代社会を生きるほとんどの人間の身体・心の中にしっかりと根を下ろしているからである。

『科学的』ということを守ろうとする力は、戦前の日本にみられた『天皇は神聖にして犯すべからず』という天皇絶対主義を官憲によって守ろうとした事以上に、現代に生きる者の殆どが『科学的』という事の意味もよく理解しないまま、その内容も吟味せず盲信しようとしているため、ますます堅固になりつつある。

したがって、政治家などには辛口なことを書くマスコミも、こと科学的というラインに触れる事実の報道には弱腰で、たとえば断食、超少食などで難病が回復したような事実を伝える週刊誌などの記事も、決して真面目には書かず、必ず茶化して、その驚くべき事実の衝撃を弱めようとしている。

現代の日本は表現の自由が認められているというが、このように暗黙のうちに行なわれる自主規制は少なくなく、私などもその根深さを痛感することは多い。私の場合、いつそれを感じるかといえば、スポーツ選手に私の技を応用して、そのスポーツで有効と思われるデモンストレーションを行なった時である。たとえば、サッカー選手との競り合い、ラグビー選手のタックルの潰し方、柔道選手との、いわゆる組み手争い、といった場面で、各スポーツではそこで採み合い、もつれる場面を、私があっさりとかわしたり、崩したりすると、その時は驚かれたり興奮されたりするが、その後なぜ私が簡単にそうした事が出来たのかを学び研究したいという者は千人に一人もいないからである。

それは、そうした場面であまりにあっさりとして処理されてしまい、時に気まずい沈黙に支配される事からも容易に推察出来るが、人間はいままで自分が信じてきたものから理解不能なことが起こると、その事実を記憶の中から削除したくなるらしい。これは、自分がこれまで生きて努力してきた事が無駄だったとは思いたくないという、ある面人情としては理解できる感情が働くからであろうが、そうすると『科学的とは事実を冷静かつ客観的に

観る態度』という大前提から大きく外れてしまうのだが、その矛盾を直視できる人は大変少ないようだ。」

・命懸けだから育つものがある

もう一度、子供の教育に話を戻してみよう。教育関係者は誰でも口に出すことであるが、子供はこの10数年で決定的に変わってきている。現状では、そのそもそもの根本的なやる気、人間としての活気が子供になくなってしまっているというのだ。昔は、子供は本は読まなくても漫画は勝手にでも読むと言われていたが、漫画ですら読む集中力が持続しなくなってきている。それを示すかのように少年漫画誌の部数減少には歯止めがかからない。コンピューターゲームですら同様に、業界では「ゲーム離れ」がささやかれている。

また、ここ数年で、テレビ番組のほとんどにテロップが入れられわかりやすくする工夫がされている。当初は急にチャンネルを変えてもすぐに話題を理解できるように配慮されていたものなのだろうが、しかしもうあのテロップなしにほとんどの子供はTVを理解できないのである。若者向けの連続ドラマなどは、その連続性を視聴者が一週間というスパンで持続できなくなっているために、ほとんど一話完結のオムニバスの様相を呈してきている。映画などはもう論外で、90分でわかりやすく一つの因果連鎖でのみ辿れるものがほとんどである。

このように、どこにでもある日常の風景は、根本的な危機の所在を現している。町中に目を転じると、母親は携帯でしゃべりながら、子供のベビーカーを押している。子供は、母親の言葉を聞いてはいるのだが、それを吸収する以前に、それらを自分に関係ないものと認識して、受け流す技術を身につけようとしているのである。やる気さえあればどんな環境でも何でも吸収して大きくなっていくというのはもはや過去の話になりつつある。

甲野氏もこのような現実を認識している。「今は放牧されても天然の草を食べれない状況ですよ。いろいろ手をかけられて、食べやすくしたえさをもらっていても、それを吸収できない。すべての子供がそうだとはいませんが、家畜のような状況になっている。」現在の都市生活においては、誰もがお腹がすいていないにも関わらず、時間が来たからといって食事をし、栄養失調などほとんど見られないにも関わらず、「不足しがちな栄養素」を補うべくサプリメントやバランスの取れた食事の重要性が強調されている。知識においても同様の現象が見られる。インターネットですぐに必要な情報が過剰に引き出せるこのご時勢において、知識に飢えた若者などほとんどいるはずもない。「生きる力」で言われるように、教育にも求められるのは結局バランスなのである。つまり、今の社会ではこれしか言いようがないのである。

こんな状況だからこそ、甲野氏はあえて子供に本当に必要なことを求めさせなければならないと言う。子供の「やる気低下」、「無気力」が叫ばれる中、最近流行の教育工学は、ICT時代の学習環境をどのように整備するかを議論しているが、コンピューターを用いて、「やる気」が出るというのなら話はもっと単純だろう。「馬を水の側に連れて行くことはできるが飲ませることはできない」という昔からのことわざの意味をなぜ今考えないのか。社会の問題もそうであるが、それは環境やマニュアルの問題というよりも、もっと根本的

なところで人間に関わる危機なのではないか。それは学力低下といった程度の危機ではない。

国内の災害や事件等にも際しても、新聞は阪神大震災以来、子供の心のケアといった紋切り型の記事が並ぶ。現在の社会において、苦労や困難・悩みという言葉は消え、すべてPTSD、うつ病といった心理学・医学用語に置き換わっている。つまり、専門医師・カウンセラーの治療によって、それらは治癒可能なものとされた。いや、逆に考えると、それらは人生の苦難ではなく、専門家なしでは癒えることのない「病」となってしまったのである。

そのような社会に対して、甲野氏は先の文章で『『生きる』という事はリスクを伴う』とまで言い切っていた。それゆえ、そもそもの問題の所在である学校をなくしてしまうことまで甲野氏は論じている。「学校は小学校の低学年だけにして後はどうしてもいいよ、好きなところに行けばいいよとすれば、いじめや自殺なんかなくなる。」

このように生きることのリスクと教育の連関について述べれば、放任主義どころか、子供に体罰を与え、厳しくしつける「昔のような軍隊式・スパルタ式教育がいいのですね」と単純に誤解されるかもしれない。だが、そのような方針を信奉する多くの少年スポーツの指導者は、ほとんど自らの学生時代のコンプレックスや現在の仕事の憂さを子供にぶつけているだけだろう。スパルタ式は子供の感性を鈍くし、猜疑心を生むだけであり、また同じような指導者の再生産をするだけである。

そうではなく、自然においては、危険は常に日常に満ち満ちているということなのだ。この自然とは、単に山や海に向くことではなく、日常においても自らを安全な抛り所から引き剥がし、自分の頭と身体で生きることによって見出されるものである。命賭けだから育つものがある。いつの間にか、命が一番大切なものになってしまった。それでは身もフタも夢もロマンもない。ただのよくできた機械に人間をしてしまう。二つない命を何に賭けるか。だからこそ生きているという時間がある。使い道がないまま、去勢されたまま皆生きている。結局命を守ることしか、教育は教えていない。だから、生きる力とは、何も伝えていない言葉なのだ。

このように甲野氏の考えをまとめるならば、あまりにも過激な言動と受け取られかねないだろう。世の人はやはり「甲野先生は武術家だからそんなことが言えるのですね」といって、その発言を紋切り型の言葉として受け流すことだろう。しかし、今の世の「ともかく安全に」という風潮を人々が皆好んで受け入れているとは思えない。近年の「はしか」の流行にともなう騒動などを見ていると、ほとんど社会的ヒステリーとしか思えないものがある。また、数年前から毎年流行している、鳥インフルエンザに罹患した鶏を大量に「処分」するあの光景をTVで繰り返し見て、何も嫌悪感を感じない人間はほとんどいないだろう。加えて恐ろしいのは、社会的ヒステリーと化したリスク回避の風潮は、それに従わない人間を処断する空気を持ち合わせていることである。コンプライアンスという近年の流行語は、そのような嫌悪感や戸惑いを一言で覆い隠し、社会全体を覆う「潔癖症」を加速させていく。

また、病気でもない出産を、医療行為を通さずに行うと言うだけで、その夫妻はどれほどの親類縁者から叱責されることか。すでに見たように、自らの力で子供をこの世に送り

出すという歴史はとうに失われ、数%のリスクのために私たちは出産という営みにおける身体の自発性を社会全体で忘れ去ろうとしている。

では、子供をどうすればよいのか。放っておけば、何かに打ち込む情熱は沸いてくるのだろうか。それは実際のところはわからない。何かをもっているでもそれを生かす場に出会えない場合もあるだろう。やはり人間の人生は賭けなのである。しかし、ここでは先天的に情熱を持っているのかどうかよりも、今はそれを親や教育が過保護にすることによって、消してしまう、涸らしてしまうことに本当に真剣に注意を向けるべきではないか。

リスクマネジメントという社会の価値観、つまり「できることはやって予め守っておかなければ」という価値観こそが、子供をだめにしているのである。だって、そうだろう。幼い子供はいつも危ない橋を渡ろうとしているのだ。その危うさをじっと見守る緊張感こそが、子供のみならず、親と教師を育てる。しかし、社会は予めその危うさを排除しようとしているのだ。そこでは何も育たないだろう。

甲野氏は「そういう中でたとえうちの子が死んだとしても文句は言わない」とまで言っている。「私自身でさえまだまだ生温いと思いますよ。命がけになるという経験、それやると全然品格が違ってくる。」

情熱は今の社会で「病」と化している。情熱とは科学に反し、人生を狂わせるものだからだ。しかし、科学の予見通り進む人生とは一体何なのだろうか。そのような人生観が人間を機械にしてきた。もうそこら中にSFの世界の住人だった、機械人間・パソコン人間はごろごろしているではないか。

・生きることのリスクを越えて

人生には科学が介入する余地はない。たとえ、医者に「手遅れです。そんなになるまで放っておいて」と言われても、「私の命なんだから、他人にそんなことを言われる権限はない。命に手遅れだなんて言う他人は無礼で失礼極まりない」と甲野氏なら言うのだろう。

「人それぞれでももちろん結構だが、この生き方の方が筋が通っていると思わないのはおかしいでしょう。誰もそこまで突き詰めて考えていない。覚悟もきまっていないし、ちゃんと人が生きるとは何かを考えていない。」

ここまで教育の問題として書いてきたのだが、根本的には生き方の問題なのである。生きていることの満足感と経済的安定・裕福さのどっちを取るのかということである。人間の人生の矛盾は、その場限りの娯楽やメディアを賑わすイベントで誤摩化されている。人の幸せとは何かを自分の頭で考えていない。

教師でも親でも、1990年代頃から子供の生き方には踏み込めなくなってしまった。近年、学校教育は、「心のノート」やキャリア教育の導入などで新しい柔軟性を得たかのように見えるが、それらは結局は失われたものの人工的な補いにすぎない。また現在、食育といった生活の根本問題に踏み込んでいるが、大体の実践において、結局は市場見学や農業体験をやって「楽しかったね」が関の山である。「誰もが農薬やファストフードが悪いというが、農業という人為のもっているそもそもの業の深さには誰も触れない。大規模農業、遺伝子

組み換え作物という技術以前に、同じものを人為的にたくさん作るというのは、自然に適わない行いなのかもしれない。生物のある種族だけ増えると、自然の摂理はそれを減らそうとする。そのような農業は、必然的に機械を必要とし、農薬を使わざるを得ない。そうだとすれば、雑草と共存する方が自然に適っている。ある作物だけをつくるというのは、やっぱりずいぶん考えなのではないか、そこまで教育の場で突っ込んだ話し合いをしなくてよいのか」と甲野氏は問いかける。

さらに甲野氏は、近年の「食育」という誰もが疑わない流行に対しても根本的な批判を差し向けている。

『朝食をしっかりと食べよう』ということは、近年、国民の常識、良識として広く流布され、これに刃向かう者は非国民といった眼で見られがちである。しかし、人間も動物の一種である、という冷静な観点に立って考えれば、この朝食必食運動が、いかにおかしなものであるかは明白である。

私などは、こうした朝食必食運動は人間という生命体への冒瀆とさえ感じられる。なぜなら、人間以外の動物は冷蔵庫など持っておらず、食料を調達に出かける前に腹ごしらえをするなどという事はないからである。つまり、ほどほど空腹な時が最もよく身体が動くというように身体が出来ていなければ、不都合きわまりないからである。

人間にとって食事は自動車におけるガソリンとは異なるものである。自動車はガソリンがなければまったくどうしようもないし、燃費効率のいい車といっても、それほど驚くほどの差異はない。

しかし、人間は個体により生活習慣により燃費効率ともいえる食物の摂取量の差は、まさに天と地の違いといえるほどのものがある。たとえば、その最も驚くべき例は、『食べること、やめました』（マキノ出版、2008）の著者、森美智代女史の例だろう。森女史は二十代の初め、国の認定する難病の一つ、脊髄小脳変性症に罹り、現代医学では手の施しようがないといわれたものを、大阪八尾市で断食、生菜食を実践指導し、多くの難病患者を救われている甲田光雄医師の許で生菜食の超少食療法と断食を開始。常識を全く無視している観のある、少量生菜食に親しむうちに症状は軽減し、同時にエネルギー効率が極端に向上したのである。しかし、常識無視の少食でも体重が増加するため、次第に食量を減らし、1996年以後は、遂に150グラムの青菜をミキサーにかけてから絞って青汁として飲むという、1日僅か約50キロカロリーという常識では到底信じられないような食量で、体重は減るところか少しずつ増え、96年は47キロだった体重は、現在は60キロにまでなっているという事である。

森女史の身体は、何度もさまざまな機関で調査され、腸内細菌が人間より牛の状態に近いこと、アンモニアなど普通は体外に排出される窒素化合物まで蛋白質の材料として利用しているらしいことなど、驚くべき特徴が見つかったというが、それにしても1日青汁1杯（正確にはこの他にスピレンという藻からとったサプリメント20錠に整腸用エビオス20錠、それにビタミンC1錠が加わる）という食量（というより飲量）で、血液にも異常はなく、骨密度もあり、60キロの体重を維持した上、鍼灸師として毎日働き続けられるという事は、現代栄養学の常識が遥かに霞む事実である。

しかし、こうした驚くべき事実を難病の対策や環境問題への対応のため、国が積極的に研究しようという気配はもとよりない。それは、現代は科学的という事に対する締め付けが何よりもきつからである。もちろん、それ以外にも製薬会社の利益とか現代医学の権威といったものを守ろうとする、絶対的ともいえる現代の精神的統治構造が堅固にあるためだろう。」

このような事例は一般には受け入れられるものではない。だが、逆の例を取り上げてみれば、人間にとっての食事というものの多様性・複雑さついて思い知らされることになる。それはテレビで人気の大食い選手、フードファイターの存在である。彼らの中には大柄の男性もいるが、しかしいくら食べても体型に変化が見られない小柄の女性も含まれている。つまり、いくら食べてもその栄養素を吸収しない身体もあるし、また逆にほんの少量の食事から必要な分の栄養を十分に吸収できる身体もあるということである。こう考えれば、朝食を食べなければならぬとか、一日に30品目とかというのは、食料廃棄率が25%にまで及ぶという飽食の国が作り出した共通幻想に過ぎないということがわかるのである。現行の学校での教育内容は、様々な監視を受けているため、人間の根本的な営みである食事をめぐってもこのようなところまではとても話せないというのが現状である。しかし、そこに留まることは、従来の社会的価値を補強するものである。結局は、ゆとり教育か脱ゆとりか、また朝食を食べるかどうかという、そんなレベルの問題ではないのである。日本の経済が豊かになるにつれて、世の価値観に逆らわないで考えないで済む、悩まないで済むのが「いい人生」になってしまった。

甲野氏は自らの人生を振り返り、このように述べている。

「私が過去のしがらみに比較的とらわれず、武術の道を専門とする生活に入ってきた三十年、一度もスランプ等に陥らず研究を続けてこれたのは、私が自分が行なう技を正しいとか素晴らしいと一度も思ったことがないからである。もちろん何か新しい気づきや発見があれば、『これは何か思いがけない展開がありそうだ』と希望を持って、その研究に集中する。しかし、どれほど研究稽古しても、古の真に驚くべき武術の名人の技は遥かに彼方である。そして、遥かに彼方だけに、それを目指していくためには、自分の技をいいとか、その技の理論を守ろうとな どという事に時間をかけているヒマはないのである。

自分が気づき、みつけた技と、その理論を乗り越え乗り越えしていかなければ、私自身が腐ってしまう。冷静に考えれば、すでに還暦も間近な私が、この先どれほどの精進をしたとしても、古の名人の世界に到達することは不可能だろう。しかし、それに向けて歩き続けていないと、私自身の生きている意味が空中分解して消滅してしまうのである。

最近フト思うが、もし私が『ああ、もうこれ以上先へは進めないな』と、自分の技の研究に限界を感じたら、その時は私自身の生きようとする意欲も止まると思う。」

当然のことならば、人は栄養素が満たされているから生きるのではない。またパンのために生きるのでもない。何か人生を賭けて、命を削ってももよいと思うもののために生きるのである。21歳の時、人間の運命は決まっているのか、それとも自由なのか、このことを納得するために、甲野氏は武術を始めた。自分が生きているということにどれだけ納得できるかということ、これだけわかれば何も要らないと言う。

「武術は人間にとって切実なものを最も端的に扱うものである」。これは約三十年前私が武術稽古研究会を立ち上げ、松聲館道場を創った時に浮かんだ言葉だが、この言葉は三十年経った今も少しも変わっていない。

人が生きていくという事は、常に人と対応し、環境と対応していかなければならない。その自分が他者と対応交流するという事を、その極限の世界をモデルとし、そこに至る日常から考えさせるものを武術は持っている。私の武術は現在、スポーツへの応用や介護法といったジャンルで注目されているが、私としては武術とは人が人として生きる知恵を発見し育てる稀な教育体系であり、その事に気づき注目して下さる方が一人でも多く出て下さることを願っている。」

結びにかえて

もちろん、ここで甲野氏が提唱していることは、そのまま学校教育で受け入れられるようなことではないだろうし、また学校不用論にまで行き着くのだから、そもそも学校教育では扱えない範疇の事柄なのかもしれない。しかし、その場しのぎではなく、本当に、この今という時間の中で子供に「生きる力」を、「総合的な学習」をとるのであれば、また大学という学問の府をその理念の基づき甦らせるのであれば、そして医学という命に関わる仕事について教育を行いたいというのであれば、このような学校教育の埒外にあるものをも受け止めなければならないだろう。

ここまで述べてきた身体の教育は、単に教育の根底に身体の学びがあるというのにはとどまらない。人間のあらゆる営みに、身体、歴史、生命を取り戻す試みでなのである。そして、私たちが国家・科学の管理に預けてしまっている自らの身体を、自らの実感ある身体に生きているというリスクを伴って取り戻す試みなのである。

註（以下であげるインターネット上の URL はすべて 2008 年 8 月 23 日段階で接続が確認されているものである。）

* 1 養老氏との共著は『古武術の発見』（光文社、1993）など、また清水氏とは『斎の舞へ』（仮立舎、2006）の著作がある。

* 2 吉村氏については、同氏の著作『お産って自然でなくっちゃね』（健康双書、1993）や、「吉村医院・お産の家」HP（<http://www.ubushiro.jp/>）などを参照していただきたい。

* 3 A. アインシュタイン、金子務訳『特殊および一般「相対性理論」について』白揚社、2004（原著 1916）。

* 4 <http://www.shouseikan.com/zuikan0705.htm>